
マダラ蝶

絵茉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マダラ蝶

【Nコード】

N91100

【作者名】

絵葉

【あらすじ】

自分に自信がない男と一途に愛する女の恋物語

例えばそれがものすごく悲しいラブソングであっても私は涙なんか流さない。

そう決めた。

私は長女だから欲しいものは我慢しなきゃなんないし、おねだりなんて以っての外。

そう思ってたのに。

高層ビルが立ち並ぶビジネス街。紫音はそのひとつのガラス張りのオフィスで事務員として働いていた。朝8時45分に出社して、残業がなければ17時30分で上がれる。大変だけど比較的楽な仕事。仕事後の楽しみはキンキンに冷えた一杯のビール。そんなおっさんのような毎日を彼女は過ごしていた。給料は安いがここ最近念願のCBR600を買って週末は乗り回していた。

「岸田。この書類全部に判子押しておいて。全部確認済みだから」
そういつて差し出された書類は山のようにあった。その山のような書類の間に挟まれた紙切れ。そこにはメッセージが書かれていた。彼は職場の中でもモテる方だと思う。爽やかな印象は期待を裏切らない。仕事もまあまあできる。だけど紫音には何も響かなかった。二、三度、しつこく誘って来るのでご飯に行ったが、それまでだ。書類にすべてはんこを押し、彼に返すときに一言。

「今日は用事があるので無理です」

にこり笑顔を見せれば彼もにこり笑った。

「じゃあいつ空いてる？」

そう来たか。

「：今月はもう予定がつまってまして」

「来月は？」

「来月も同じく」

「じゃあいつだったら行けるの」

そんな彼に紫音はまた微笑み直した。そして真顔に戻る。

「あなたのために空けれる日なんて今後ありません。以上」

彼はそんな彼女の態度に面食らっていた。紫音はまたにこり顔に戻る。

「あ、そうそう。そんなことより日付が間違ってると思いましたよ。そっちの方を気にしたらどうですか？」

彼の肩が落ちた。

岸田紫音。その名を聞けば誰もが恐れ戦き、また憧れの眼差しを向けた。

その美貌はみなが羨み、その恐ろしさはみながビビる程。冷酷で女王様な彼女はどんなイケメンも足蹴にしてきた。イケメンだからいいとは限らないとは彼女の定義だ。その割に高飛車ではなく謙虚な面もあるから女にもモテた。

まさに無敵。そんな彼女が愛した彼はなんて幸せなんだろうと疑いもしなかった。

きらびやかな繁華街に紫音は仲のいい後輩の花村理香と来ていた。彼女も紫音信者で紫音を慕っていた。彼女達が入っていたのはAQUARIUMとかかれたホストクラブだった。まさかあの紫音様がホストを貢いでいるとはだれもおもわないだろう。実際に違うが。

「司さん！」

理香に司と呼ばれた彼は案内に通された女二人組を見た。

「紫音：理香ちゃん：」

彼もなかなかのイケメンだった。スラッとしたシルエット、物腰柔らかな姿は女性を虜にしそうだった。

彼はごく自然に紫音の顎を傾けた。

「会いたかったよ、紫音：」

「：司：死ね」

ごつと鈍い音が鳴った。彼は腹を抱えてその場にうずくまる。

「：い：い：一発だ：！」

理香が慌てて彼に駆け寄った。紫音はお構いなしに案内されたソフ

アに座る。

クスクスと笑うひざまずいている彼はこの店のオーナーだ。

「いつ見ても面白いね、君達は。司のあんな姿が見れるのは紫音ちゃんの前だけだよ」

「…子供なのよ…司は…」

「フフッ…本当に仲がいい。本当に付き合っていないの？」

「全く」

「じゃあ私なんかどう？」

「…お言葉ですが…オーナーには私以外にもっといい人がいると思います」

「そうかな…？」

「強く、そう思います」

「強く…ね。彼氏はいないんだっけ…。そこまで頑なのは気になる人がいるから？それとも――」

「オーナー！なに、人の客口説いてんツスカ」

さっきまでホスト仲間で騒いでた彼が紫音の方へやってきた。

「悪い悪い。紫音ちゃんがあまりに魅力的でね。紫音ちゃん、ゆっくり楽しんでってよ。司はもうすぐNO.1になる身だからさ。今のうちに、ね」

「オーナー！」

彼は微笑んで去っていった。

「え！司さんがNO.1?!すごいですね!…ってことは今までみたいにくっくり話せないってことですか…？」

「一テーブルの時間は決まってるよ。けど紫音と理香ちゃんは別格！VIP扱いだよ」

喜ぶ理香を横目に紫音はぴしゃりと言葉を投げた。

「馬鹿。高校のよしみだからって特別も何もないわよ。NO.1ならNO.1を全うしなさい！」

当然理香はぶうたれた。司は寂しそうな顔をしていた。

―それとも、忘れられない人がいるの？

紫音の頭の中でさっきのオーナーの言葉がこだましていた。
ぐ、とそそがれたシャンパンを飲み干す。司はそんな彼女を見つめていた。

高校三年の夏。彼氏ができた。今までもいたけどこれは一年の片思いが実ったもの。彼に初めて出会ったのは高二の春。存在すら知らなくて同じクラスになって始めて知った。彼の名前は澄田雅哉。黒ぶちの大きなメガネが印象的な彼はクラスの中でも物静かな方だった。どちらかといえばやんちゃな奴らとの付き合いが多かった私は彼を目にもとめなかった。

ある時、彼の机の上に見覚えのあるCDが置いてあった。私はなにげなしにそれを手にとった。弟の遥も同じものを持っていた。

「あ」

声のする方へ振り向くと彼がいた。

「…これ…あんたの？」

「…う…うん。岸田さんも…知ってるの？」

「…私というか…弟が…」

「そう…」

彼はいそいそと席に座った。私はCDを持ったまま立ち尽くしていた。

「…ねえ」

「なに？」

「…そんなにいいの？」

彼の表情が一気に明るくなった。

今考えたら、きっとその時だ。恋に落ちたのは。当時はこんな顔をするんだと驚いていた。そのあと、帰ってすぐに遥からCD奪ったっけ。

純粹で真っすぐな彼の心に吸い込まれるように惹かれていった。周りからは澄田をいじめるなどのなんだの言われたがそんなつもりは毛頭なかった。そしていつの間にか私の周りも彼に話し掛けるよう

になった。

人生初の告白は二年の一月だった。友達と一緒に初詣に行つてその歸りに告白した。結果は見事惨敗。

「岸田さんは本当にみんなに優しいし、器量もいい。だから俺なんかより、岸田さんには見合った人がいるよ」とあっさり断られた。その日の晩みんなの前でわんわん泣いた。そこには藤原司もいた。どうしても諦められなくて。というか後戻りできないほど澄田を好きになっていた自分に驚いていた。

人生二回目の告白は七月だった。ほぼ彼の根負けで付き合うことになった。

みんな彼のイメチェンを求めたが私はありのままの彼が好きだったし、そんな必要はないと考えていた。

それが彼の負担にもなっていたのかもしれない。

高校を卒業して大学に行つて。お互いバイトで忙しい毎日を過ごしていた。

ある日、彼から話があると言われ、彼の実家を訪れた。彼のお母さんはいつも愛想よく部屋に通してくれた。

部屋にあるフィギアを飽きもせず眺めていたら。

「紫音さん」

「ん？」

「俺たち…やっぱり不釣り合いだと思ふんだ」

「…どうして？」

振り返れなかった。彼の目を見るのが怖かった。

話がある。改まって言われたことに薄々は感じていたけど、自分の中で有り得ないと揉み消していた。

「あなたに告白されて…すごく嬉しかった。一回目はからかつてるのかなとおもつたけど…二回目は真剣さがすごく伝わった。だから俺も頷いた。この一年とちょっと。付き合っているんなことあったけど…だけどどこかあなたには見合わないと否定する自分がいたんだ」

紡がれる言葉に耳を塞ぎたかった。頭の中はぐちゃぐちゃしてて。続けられる彼の言葉に目頭が熱くなった。

「あなたには俺よりも相応しい人がいる。あの時の言葉は今でも…付き合ってる時でもずっと思っていた…」

「…どうして…!」

振り返って彼をみると涙がこぼれ落ちた。

「…どうしてどうしてなんで…?!…ッなんでそんな…っそんなことが言えるの…?!」

彼はうつむいたままだった。

「私は…っ私は本当に雅哉が好きだった…!今だって好き…!釣り合う釣り合わない…そんな問題じゃない…!雅哉が…雅哉が…っ私をすきかどうか…でしょ…?!」

私は彼の手を取った。人に縋ったのも涙したのも。こんなに欲しいと思ったこともすべてが初めてだった。求めれば求めるほど、離れていく心。雅哉の決意は固く、ぴくりとも動かなかった。

「ごめん」

ただその一言だった。私は部屋を飛び出した。

明確な言葉が欲しくなくてずっと雅哉を避けていた。電話もメールも一切無視した。次第にそれは数が減っていき、自然に消滅していった。

仕事の休憩で外にでた。ネオン渦巻く繁華街は欲望までも混ぜこんでしまう。行き交う人を眺めた。

欲望に溺れ行く者、それを餌にする者、売りとするもの。いろんな人の表情が目映えた。

ふと、視線を遠くにやれば見覚えのある姿があった。

「…あいつ…」

きっと一緒にいるのは上司だろう。愛想笑いを振り撒いていた。別れる手前だろうか。彼がこっちに向かってきた。

敢えて何も言わず目の前に立つと彼は案の定ぶつかった。

「すみません…」

顔をあげた瞬間開かれる瞳。

「よう」

口を吊り上げて、嫌みたっぷりに挨拶する。

「…ふじ…わら…？」

「覚えてくれたの？嬉しいね。…澄田くん」

黒ぶちメガネは顕在だが、かつちりきたスーツで少し大人っぽく感じた。ボタンを開けて着崩した俺とは違う。

「久しぶりだな。てっきり地方に行っちゃったのかと思ったよ」

紫音を捨てて。とは言わなかったけど。彼は気まずそうにした。

「行こうかと思ったけど…親父が倒れてここに残ったんだ…」

「今お前何やってんの？」

「株式会社三本で営業を…」

「へえ。一流じゃん」

「…藤原くんは？」

「それ、聞く？まあいいけど。俺はそこでホストやってる」

「そう…なんだ……。あの…っ」

「紫音。まだお前の背中追ってんぜ」

その響きにびくりと肩が揺れた。

「お前なんかのどがいいのか…。毎日のように俺のところにきては、浴びるほど酒飲んで。まるでなにかから逃げるみたいにな…」

困ったような表情をした。その顔に苛立ちさえ感じた。ずっと想い続けてる人を捨てた野郎。どんな神経をしてたんだ。

「言っとくがな、俺はてめえのことを考えて言ったんじゃないぞ。

俺は高一の時からずっと紫音を見てきた。紫音だけを見てきた。紫音が傷つく顔をもう二度と見たくねえ。他の野郎で涙を流すなんてありえねえ。俺は…。俺は紫音を愛してる。てめえなんかに渡さねえ」

「…ああ。俺もそう、思うよ。紫音さんは…僕なんかより藤原くんの方がよっぽど…似合ってると思うよ」

口ではそういうくせに、どこか寂しい感じを匂わせていた。

「じゃあ俺はここで。…二度と藤原くんたちの前には現れないよ」
そういつて彼はネオンの中に消えていった。俺は深々とため息を吐いた。言ってしまった。今まで秘めた想いが溢れ出す。冗談っぽく行動で示していたが、誰にもはつきりとした言葉は言わなかった。紫音に会いたい。

「司」

幻聴かと思った。会いたいと思った瞬間に紫音の声。
勢いよく振り向くと美人が立っていた。

「休憩中？」

「…いつからそこにいたの…」

「…ついさっきだけど…来ちゃ悪い？」

その強さも内面の弱さも全部ひっくるめて大好きだ。
腕を伸ばした。

「いや…そっか…。今日は理香ちゃんは…？」

「デート。だから今日は私一人…ってなに抱き着いてんの」

「紫音…」

愛しさまると吐き出すように耳元で囁いた。紫音の肩が揺れた。

「司…。冗談でやってるなら腹に一発噛ますよ」

抱きしめる力をいっそう強めた。

「…冗談じゃない。俺は…紫音、お前のことが…ずっと好きだった…」

「え…？」

「…さっきお前が来る一分ほど前に…澄田を見かけたよ」

ぐっと胸を押し返されて俺を見上げた。いろんな思いが彼女の中で渦巻いているんだろうなと感じた。もう一度彼女を胸に押し付けた。

「…司ッ！ 離しなさい…！」

「お前が澄田をまだ好きなのは知ってる…！ 忘れられないんだろ？
！ ずっとお前を見てきた。俺、お前が…紫音が好きだ」

びくりと体が揺れた。愛しくて愛しくて頭がおかしくなりそうだ。

一度堰がはずれた想いは洪水のように流れでた。

「な…なに言ってる…」

「好きだ…好きだよ…紫音。愛してる」

彼女の頭に口づけた。

「司…離して」

「…逃げない？」

「逃げない。…あんたの顔がちゃんとみたいだけ」

腕を腰に回した。体は密着したままだ。

「司…」

「いいじゃん。顔が見たかったんだろ？」

ぐっと顔を近づけてにっこり微笑んでやる。

「好きだよ…紫音」

うつとり紡ぐ愛の言葉。ああ、キスしたい。

「…ごめん、司…。私…あんたを友達以上に見たことがないわ…」

それに…あんたも言ってたように…まだ…雅哉のことが忘れられない」

そんな顔するんだ。あのいつも女王様のお前が、そんなはかなげな顔するんだ。なんか。

「妬ける」

「え？」

「…これから見ればいいじゃん。男としての藤原司を」

「…無理よ…。あんたが雅哉に会ったって言った時点で、私の気持ちとはそっちに…」

「忘れさせてやるよ」

目が合った。

「俺がお前の中の澄田を忘れさせて、お前の中には俺しかないようにする。何も、無理なことじゃない。」

あいつ、言ってたぜ。二度と俺達の前には現れないからって」

紫音の瞳が大きく開いた。

「俺はあいつとちがって逃げない。お前を守り抜く」店の中から俺

を呼ぶ声がした。休憩が終わったのだ。

「入るだろ？」

首を横に振る紫音。今にも泣き出しそうだ。

「今日はやめとく」

笑ってるけどうまく笑えてなかった。

「：わかった。じゃあ俺も上がらせてもらうちよつと待ってろ」

「何言ってるの！仕事しなさい！」

「そんなお前を一人にできるわけねえだろ！」

「今は：一人がいいのよ：。私、縛る人は嫌いよ！：私のこと好きならちゃんと働いて」

それ以上は強く出れなかった。卑怯だと思った。また連絡するといつて彼女は帰っていった。

「おう：早いお帰りで」

風呂に入ろうとしてたら玄関の扉が開いた。いつもなら日付が変わるか変わらないくらいで帰ってくる姉貴が20時前に帰宅した。いつも綺麗に整われている髪が少し乱れ、なんだか疲れているようだった。

「うん。：：：お風呂、沸いてんの？」

「うん：」

「：遥」

「ナニ：：？」

ただならぬ雰囲気は俺はごくりと喉を鳴らした。

「お風呂、先入らせて：」

「：ドウゾ」

有無を言わさぬ恐怖。幼い頃からその恐さは顕在だ。それでも顔はいいからか友達が多く、顔も広かった。

俺達は仲は悪くなかったが、めっちゃくちゃいいわけではなかった。話はするし、笑ったりもする。

ただ、彼氏ができる姉は必ずといっていいほど、家に連れて来る。

ただし、俺の場合、どこから情報を仕入れてくるのか何故か知っていた。

会う度やんちゃな感じの男が姉の後ろにいた。姉よりどちらかと言えば男が溺愛な感じだった。

だけど、一人だけ別格がいた。見た目は真面目そうな感じで大きな黒ぶちメガネが印象的だった。

俺の姿を見るなり一礼して。

「初めまして、澄田雅哉と言います」

「あ…、初めまして…！弟の遥といいます…」

「遥くん…」

つられて一礼した。

初めて挨拶してくれた人だった。弟くんとかよろしくーとか言われたことあるが、こんなにきっちりしたのは経験したことがなかった。変わった人だと思った。

「いいよ、雅哉。挨拶なんて…」

「だ…大事だよ、挨拶は…」

俺は目を見張った。雅哉さんを見る姉の表情は柔らかく、同じ屋根の下に長年いたけどそんな姉はみたことがなかった。

それから何回か話す機会があった。同じアーティストが好きなことや、あの姉から告白したことや、姉といえることで毎日がキラキラしだしたことを教えてくれた。なんだかんだで雅哉さんも姉にベタ惚れなんだと感じた。

だけどそれから一年が過ぎた頃、姉の様子が変わった。急に涙を流したり、部屋に閉じこもったり。考えられぬ行動に母さんも俺も首を傾げた。同時に雅哉さんの出入りもなくなったからそれが原因なんだと悟った。前は別れてもからっとしていた姉だったから、傷は深いのだろう。

楽器店からの帰りだった。前から歩いてくる人の姿は知っている人だった。

「雅哉さん…」

「！…遥…くん…」

「お久しぶりですね。お元気でしたか？」

「かつちりきたグレイのスーツ。それを着こなしている雅哉さんは大人だった。しかしあのメガネは顕在だ。」

「ああ…本当に久しぶりだね…。元気だよ…。遥くんも元気そうだね…」

雅哉さんは俺の背負ってるものに注目した。

「楽器…何かやってるの？」

「ええ…。バンドを少し…」

「そう…」

本当は少し有名なバンドなんだけど、反応からして知らなさそうだから、伏せておくことにした。

「少しやつれましたね」

「そう…かな？仕事が忙しくってね…」

「…雅哉さん。…今、時間ありますか？」

「…ああ。…20分くらいなら」

「ちょっと話ませんか？」

店に入るには時間がかかりすぎたので、自販機でコーヒーを買って、街のベンチに座って話すことにした。

「仕事って営業ですか？」

「ああ…。大変な仕事だよ。一言じゃ語り尽くせない」
そう言って苦笑いをした。

「営業か…。俺には向いてないかも。どちらかと言えば出無精なので」

「俺もだよ。でも仕事となると違うんだよね」

「仕事は好きですか？」

「まあまあ…かな。契約がとれるまで辛いけど、とれた時の嬉しさはすごいからね」

本当に嬉しそうに話すから俺もつられて笑った。

「…雅哉さんの優しい雰囲気は姉貴も惹かれたのかな」

「…どういう意味？」

「なんか雅哉さんといると和むんですよね。自分まで優しい気持ちになります。」

「…姉貴と別れたんですよね？」

メガネの奥の瞳が開いた。

「俺は別れたかった…。別れようと言ったけど受け入れてもらえなかったんだよ。電話もメールも一切拒否。自然と連絡をとらなくなっていた…」

「どうしてですか？姉貴といるとキラキラするって言ってたじゃないですか」

雅哉さんは空を仰いだ。俺も視線を同じ方向に向けた。

「…どうしてだろうね…。きつと…彼女が眩しすぎたんだと思う…。俺は月にも星にも向日葵にもなれなかった…」

「…そんな顔するなら…別れなければよかったのに…」

そんな俺の言葉に雅哉さんは寂しそうに笑った。

「そうだね…。でももう…戻れないんだよ…」

冷たい風が髪を撫でた。

家に帰れば姉が猫のロクを抱いてリビングのソファで寛いでいた。

そばには大好物のコンソメポテチ。

「お帰り、ボウズ」

「ハゲてねえし。ただいま」

「ボウズがみんなハゲてるなんておもったら偏見よ」

相変わらず生意気だ。冷蔵庫を開けて麦茶を取り出した。コップにお茶を注ぐ。

「はい」

「よくわかったわね」

「何年一緒に住んでると思ってんだよ…」

「躰が行き届いてる…」

「俺は犬か…」

自分の麦茶を飲んだ。

「ポテチ…太るよ」

「その分動くからいいのよ」

「…机に向かう仕事のクセに」

「生意気よ、遥」

「どっちが」

ロクがみゃあと鳴いた。テレビは音楽番組が流れていた。

「この人すれ違い様にみたことがある」

「そう。すごいわね」

姉は芸能人に全く興味が無いらしい。人のこと言えないけど。

「…今日楽器屋行ってたんだ」

「うん」

ぽりぽりとポテチの音が響く。

「…雅哉さんに偶然会ったよ…」

ぽてっ。

ポテチが床に落ちた。構わず続けた。

「そんで話し…」

「どこで?!」

「だから楽器屋…」

「どこの?!」

「中央通のとこだよ…。あの辺営業で来てるんじゃないかな…」

すごいいきおいで肩を掴まれた。ロクが飛びのいたぐらいだ。なんだ、両想いなんじゃん。

姉は俺から離れて膝を抱えた。

「やっぱあんた生意気」

「…なんで」

悔しいんだろう。会いたかったんだろう。

「…司もこの前会ったって言ってた」

「司さん？」

「うん」

あのおちやけた人か。

「何があったか知らないけど、雅哉さん寂しそうだった。もう二度と戻れないって言ってた」

「そう…。なんであんなにそんなこと話すのよ…」

「だって俺、優しいし…いでっ」

「喧しい！」

姉が投げたクッションが顔面に綺麗に入った。

「俺は月にも星にも向日葵にもなれなかったってさ」

「だから人を太陽扱いすんたっての！」

悪態を吐いてる割に随分楽しそうだ。悲しいんだか楽しいんだかどっちだ。ころころと表情を変える。

「…会いたい…」

切実な声が響いた。

「どうしてもあなたが好きなの。諦めきれなくて…しつこい奴だと思ってくれていい。だから付き合ってください」

熱烈な告白だった。ホント言うはずと前から好きだった。だけど、俺とは世界が違うし、あの人は日向の人。俺は日陰の人。どうしたって気づくわけがない。それがひよんなことから事態は変わった。

そしてその熱烈な告白に頷いてしまった。

まさか付き合えるとは思ってなかったから、毎日が本当に楽しくて。紫音さんは俺にとっての太陽だった。優しくて温かくて。時に想いの強さに俺も流されて二人で愛に溺れたこともあった。

付き合って三ヶ月後。俺の身の回りがそわそわしはじめた。もともと静かな友達が多かった俺は彼女と関わることで、関わる人も変わっていった。だから付き合った時も違和感はなかったのだが、一部が急に変わったのだった。

朝、登校すると上履きがなくなっていたり、教科書に落書きがされていたり。

さすがに紫音さんに言えなかった。我慢すればおさまると思っていたが、ヒートアップする陰湿なそれはついに呼出しを喰らった。

繰り出される言葉は罵詈雑言。紫音さんの直接の友達からではなく、紫音信者の人達だろう。

『暗いお前に紫音さんは似合わない』『同情で付き合ってやってる』

『司さんの気を引くために付き合ってる、ただの罠』

俺だって不釣り合いだと思ってる。でも好きなんだ。

それは高校を出てからもそうだった。一緒にデートに出かけても不思議そうな視線。たまに俺がいても紫音さんは声をかけられたりしていた。本当に恋人として見られているんだろうか。正直惨めだった。

彼女は美しいから。太陽だから。みんなのものでなくちゃんならない。手放さなければならぬと思った。

「俺達：不釣り合いだと思っただけだ」

あれから八年。俺は繁華街にいた。もう二度と現れない。そうあいつと約束した。だけど愚かな俺は毎夜店の前にいた。ホストの店だから男がはいるわけには行かず、しばらく眺めてから帰っていた。今日も同じようにしていたら、向こうから美人が歩いてきた。

俺は思わず背を向けるが、どうやら違ったみたいだ。中に入るとき背中を見たが紫音さんじゃなかった。

「ふう」

深いため息がこぼれる。

毎日毎日何やってんだか。戻る気はないといったのも自分。別れようといったのだった。

帰ろう。そう思って顔をあげたら。目の前にはさっきよりもっと美しい人がいた。その人はなぜだか俺と目が合うなり泣き出しそうな顔をしていた。

「紫音：さん」

「雅哉」

彼女の瞳から大粒の涙がこぼれた。

「……あ……あいた……かつ……た」

会いたかった。

行き交う一部の人が俺達をじろじろと見てるだろうけど気にもとめなかった。

「……元気だった？」

その問い掛けに彼女は大きく頷いた。ホントにこの人は涙まで綺麗だ。

「よかった……。久しぶりだよね、こうして顔を合わせるの……。別れて以来だよね」

「そうね……」

「仕事は？ 大変？」

首を横に振る。

「雅哉に比べたら……きつと大したことない」

「ああ……。遥くんに聞いたの？」

「うん……」

ホントに他愛のない話。これ以上は多分……

「じゃあ……俺、帰るね……」

ずっと彼女の横を通ろうとすると腕を捕まれた。

「待って……！ 雅哉……。話がある……の……」

「……なに？」

「……どうして……。どうして、遥にあんなこと言ったの？」

「……なんのこと？」

「『俺は月にも星にも向日葵にもなれたかった』」

「ああ……。うん……」

「……私は、太陽でもなんでもないし、ましてや……。あなたにそんな存在になってほしいなんて思ったこと、一度もない……！」

「うん……」

「不釣り合いだって……見合っていないだなんて……。誰の基準で物を見ているの……?!」

「…世間一般だよ」

「…馬鹿じゃない…。世間が何よ…。人の目が何よ…。第三者なんか何もわかってないじゃない！馬鹿馬鹿しい」

「わかってないのは！」

声を荒げた。

「わかってないのは…あなただよ…紫音さん。…言えなかったけど…俺あなたと付き合いだして、いじめを受けてたんだ」

「え…？」

「それだけじゃない…！周りの視線はどうみたって悲惨なものだった。憐れむような…。もううんざりなんだ！あなたといると…あなたが隣にいと…惨めだし、寂しいんだ！」

今まで溜まっていたもやもやが吐き出た気がした。

言葉を続けようとしたら、間に誰かが入ってきた。

「はい、ストップ。人の店の前で喧嘩すんな。つか、澄田。てめえは二度と来ねえつつたじゃねえか」

「司…！」

「藤原くん…」

「あんたには関係ない！今すぐ仕事に戻りなさいよ！」

「それが関係あんの」

「はあ？あんたN.O. 1の身でしょ？！客待たせてどうすんの！オ―ナーに怒られるわよ！」

「ちょっと黙って」

そういつて藤原くんは彼女を片腕でホールドして口を手で押さえた。

「澄田」

「なに？」

「すまない」

「え…？」

綺麗な謝罪。彼の腕の中の紫音さんが暴れるのをやめた。

「お前のいじめ、どうやら俺の何気ない一言でやってしまったみたいなんだ。先日…高校の時の同級生の女がたまたま来てさ。顔見知

り程度だったんだけど。…紫音がお前のことばかり構うから、面白くなくて。つい…」

「つい、…何よ」

口を塞いでいた手を易々とはずし、紫音さんはぎろりと彼を睨んだ。
「…『澄田、うぜえなあ』…って…。それが発展したらしい…。当然俺には身に覚えなことだけど、そんなことになっているなんて知らなかったし…情けなかったから余計なことしてくれるなどは言っただけ…」

「あんたって最っ低ね！よくもまあそんなことを…！」
ぴしゃりぴしゃりと落ちる雷は藤原くんを怯えさせた。

「…いいよ、もう。過ぎたことだし。藤原くん、ありがとう」

「…い…いえ…」

「紫音さん」

「はいっ」

びくりと俺の方に向き直った。

「俺、紫音さんのこと好きだったよ。告白してくれた時は、本当に嬉しかった。でも…元には、戻れない。ごめん」

「彼女が…いるの？」

首を横に振った。

「…気になる人…とか？」

首を横に振った。

「だったら…！」

「紫音さん、」

「好きなの！政哉。政哉のことがどうしても欲しい。この八年間ずっと政哉のことを忘れたことがないわ」

宥めるつもりがほだされて、その言葉にぐらりと揺らぐ。

「政哉」

そして二年ぶりの抱きしめ。久々の温もり、紫音さんの香り。

「…どうしてそこまで…俺にこだわるの…？」

紫音さんがぎゅっと顔を押し付けた。

「…唯一…世界で、唯一…」

ごそごそと顔をあげると、顔は真っ赤で、目が潤んでいた。きっと照れているんだろう。恐いと聞いたことはあるけど、俺はそんなことを考えたことがなくて。きっとそれは俺だけの特権。そう考えるとゾクツとした。ああ、やっぱり何があっても俺は紫音さん以上に「あいしてしまっただけ」から…」

「…こんなエゴな俺でも…いいの？周りの目を気にしてるような…」
「いいよ。政哉はもっと自信持った方がいいよ…。政哉にはいいとこいっぱいある。ね？」

そういつて抱き着く腕を離し、その手は顔へ行った。高校の時からしていた眼鏡を外された。

「眼鏡してる政哉も素の政哉も、両方好き」
にこりと綺麗な笑顔が胸を打ち抜いた。

「ちょっと…お前ら…。俺がいること忘れてない？」

「司…あんたまだいたの？早く店に戻ったら？」

「紫音！酷くねえか?! あゝ! 俺ってどこまでお人よし…」

藤原くんの方をむいている彼女を自分の方に向けた。

「政哉…？」

そして口づけた。それはもう深く深く。

紫音さんの腕が背中に回り、俺は彼女を引き寄せた。

「好きだよ…紫音…」

「まさや…」

「澄田…殺す…!」

「え? あ…なんで？」

「クロス…」

藤原くんに追い掛けられる俺と、今だキスの余韻に浸っている紫音さん。藤原くんは我に返った紫音さんに雷を落とされたのだけれど今後もお前達に関わるからと宣言して店の中に戻った。その帰り道。
「…これでも遥には感謝しているの」

「どうして？」

「政哉と知り合うきっかけは遙が持ってたマイナーなCDだったし、今回だって…」

「うん。…そうだね」

「うちの遙ね…今バンドやってんの」

「知ってる。この前会った時楽器背負ってたから…。紫音さんのことだから毎回ライブなんか行ってるの？」

「ライブは行かない…。けどテレビは見る」

「テレビかぁ。………テレビ?!」

「うん。あれ?言わなかったんだ、遙。

フォグストラップって知ってる？」

「うん…名前はちよろっと…」

「あれのボーカル」

「ええええ?!」

そんな話もしながら彼女の家に着いた。

「じゃあ…また連絡する。連絡先変わってないよね？」

「変わってない。紫音さん。着拒、解除しておいてね」

苦笑いをした。

「はい。…じゃあ」

「またね…」

名残惜しげに離れていく手。だが、すぐに引き寄せて彼女を抱きしめた。

「大丈夫。…また、明日」

髪を撫でて慰めた。

「うん…また明日」

ぎゅっと抱き返されてすぐに離れた。また名残惜しくなるから。そうして俺達は家に帰って行った。

「お帰り…早いお帰りで…」

「ただいま」

その日の姉の笑顔は極上だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9110o/>

マダラ蝶

2010年11月14日15時51分発行